

# 異次元の方法 確立前進

## 火山ガラス分析 製作過程解明へ

### 土器に眠る 記憶

弘大考古学最前線

—上—



平川市の白岩森林公園で見られる「尾閉山凝灰岩」。今回調査した北海道内の土器の胎土に、「の土」と同じ元素組成の火山ガラスが眠っていた

よみがえれ、土器に眠る 給目足だったのか」。研究チームのリーダーで弘前大学の製陶学を専攻する胎土(土器に使われた土)中の火山灰由来成分「火山ガラス」の分析で科学的に解明する画期的な手法が、弘前大学などによる研究で、確立に向けて前進している。従来とはまったく異なる手法で、考古学に新たな地平を開くことが期待されている弘大の研究の最先端をのぞいて。(外崎英明) 【本記1画】 精製土器ほど多く遠くまで

「果たして縄文土器は自運はれている。各地に流通した「原材料」とは違い、土器の場合は技術という「付加価値」が流通しているという点で注目される。土器の移動を突き止めれば、土器を中心に設定される文化圏、通婚圏などの集団関係や、社会組織などを考える上での堅固な論拠ともなる。関根教授は「最終的には縄文社会の在り方にまで迫りたい」と意欲を見せる。火山列島と呼ばれるわが国、土器の胎土には、火山ガラスが多く含まれている。さらに、土器は焼成温度が低いと、土の組成が熱の影響で変化せず保存されていることも、研究にとっての大きな利点だ。

火山ガラスの主成分であるケイ素、チタン、アルミニウム、鉄、マンガンなど九つの元素の量を、火山ごとのデータベースと比較することで、土器が製作された地域の範囲を知ることが出来る。さらに、土器が製作された年代は、少なくとも噴火よりも後の年代へと

関根教授は「精製土器に開いては、高度な技術を持った専門のムラで作られ、他に搬出されていくことも考えられる」と指摘する。ヒスイや黒曜石などといった、限られた原産地から

分類できる。これにより①土器の搬入、搬出や模倣の状況解明②胎土をどこから採取したのかなど土器作り技術の解明③噴出年代を指標とした、従来の形式や出土位置とは異なる新たな方法の土器編年の構築」が期待できる。従来の「型式学」「層位学」などは全く異なる「異次元の方法」(関根教授)だ。関根教授は「これまで、多くの土器を見て、その経験値などからさまざまな仮説を立ててきたが、それを科学的に検証することが可能になった」と意義を強調する。関根教授と研究を共にする1人が、「石の上にも39年」と題する最終講義で「の春、弘大を退官した柴正敏・元教授。縄文ロマンの文脈を高度な分析手帳で浮き彫りにする第一人者は「火山噴出物の分布状況をより多く、精密に調べ、さらにデータベースの整備を進める必要がある」と意欲を見せる。

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。  
東奥日報社に無断で転載することを禁止します。  
[問合せ先]弘前大学理工学研究科  
E-mail:r\_koho@hirosaki-u.ac.jp